

後漢・魏代における天・人思想の展開

好 並 隆 司

< 1 > 光武帝は凶讖を信じた。その契機は「宛人李通等以凶讖、説光武云、劉氏復起、李氏以輔」（後漢書卷1）とあって、李通の凶讖にかゝる意見がその基になっている。建武元年に「光武先在長安時、同舍生彊華自関中奉赤伏符曰、劉秀發兵、捕不道四夷、雲集龍闕、野四七之際、火為主。群臣因復奏曰、受命之符、人応為大・・今上無天子、海内淆乱、符瑞之応、昭然著聞、宜答天神、以塞群望。光武於是、命有司、設壇場於鄗南千秋亭五成陌」（同 前）とあり、注に「恵棟曰、東觀記、時伝聞不見赤伏符文。軍中所上未信、到鄗上、所与在長安、同舍諸生彊華在長安奉赤伏符、詣鄗与上会」というように、注では軍中における光武はなお、この讖を信じなかったというが、彊華が赤伏符を奉呈してより以来、こうした天命を信じ、これに応じる事に努めることとなった。建武17年2月に日食があったが、この注に「東觀記曰、上以日食、避正殿、読凶讖多、御座廡下、浅露中、風發疾苦、眩甚。左右有白大司馬史、病苦如此、不能動揺、自強従公出乘、以車行数里、病差」とあって、日食に対応して光武は「凶讖」を読んだという。続いて中元元年11月甲子にも日食があって、「宣布凶讖於天下」とあり、この場合は自分だけでなく、天下にたいして「凶讖」を宣布した。

さて、「凶讖」は李通によって提唱されたが、その李通は「父守、初事劉歆、好星歴・讖記・・通素聞守説讖云、劉氏復興、李氏為輔」（後漢書15）とあって、父は劉歆に讖記を学び、通はそれを受け継いだとある。その注には「王補曰、袁紀、守治家与子孫如官府。少事劉歆好星歴讖紀之言云、漢当復興、李氏為輔、私竊議之非一朝也」とある。同じく「後漢書」15において「通因具言讖文事。光武初殊不意、未敢当之。時守在長安。光武乃微覲、通曰、即如此、当如宗卿師何。通曰、已自有度矣」とあって、光武はこの時点では、まだ「讖」を信じてはいないようである。

他方、陳元・桓譚・杜林・鄭興らが「左氏春秋」を学官に建てようと試みているが、范升は左丘明が孔子の子孫でないという反対意見を述べたため、その事は成就しなかった。下って三代の章帝の時期になって、劉歆に師事した賈逵が鄭衆とともに「左氏春秋」は公羊・穀梁よりも優れているとし、左氏を好んでいた帝の同意を得た。既に光武期、寇悖・馮異・孔奮らが左氏を習得しているし、劉歆以来、その学は普及してきていた。ただ問題は光武帝による凶讖信仰がその障害となっている。すなわち儒家の人道中心の春秋の思想と天道に属する讖文との矛盾をどう調整するかである。この点については既に拙文「後漢

期、皇帝・皇太后の政治と儒家思想」^(註1)で賈逵がそれを行ったことを明らかにしてきた。こうして後漢王朝では正式の学官が定まり、公認の学が定まったけれども、中期以降、それとは別途の思想が生じてくる。

<2> 漢代、天道系の太平道思想は于吉から始まるようであるが、「漢・元帝時、隨吉于曲陽泉上、遇天仙授吉青縑朱字太平經十部。吉行之得道、以付崇。後上此書」(三国志補注・卷6)とあって、前漢の元帝時(B.C. 48)に于吉に師事した宮崇が太平經を朝廷に献上したとされる。「志林」には「初順帝時、琅邪宮崇詣闕、上師于吉所得神書于曲陽泉水上、白素朱界、号太平青領道、凡百余卷」とあるので、先述の宮崇より20年程時代が下る時点である。続いて「後漢書裴楷伝曰、臣前上琅邪宮崇受于吉神書。又曰、宮崇所獻神書、專奉天地、順五行爲本。亦有興國広嗣之術。其文易曉、參同經典。又曰、其言以陰陽五行爲家、而多巫覡雜語。有司奏崇所上妖妄不經。乃収蔵之」(三国志補注。卷6)とあるように、宮崇が師とする于吉が得た神書を奉呈したと朝廷への献納を記す。これが太平青領道と名付けられる百余巻の書籍であった。その内容は天地を祀り五行に従う事を基本にしていて、興國広嗣の術を実現するものという。この書の文章は分かりやすく、しかも經典と相応じる内容であったらしい。その思想は陰陽五行を基本とするが、その中に巫覡の雜語が混在していたもので、かかる宮崇の書は妖妄であり、經典とは言えないと断定され公開される事もなく、そのまま宮中に収蔵されたとある。同書にはまた「神仙伝曰、宮崇者琅邪人也。有文才。著書百余卷、師事仙人于吉」とあって、先の神書と著作巻数が同じなのを見ると、この書はあるいは宮崇の自著かも知れない疑いもある。ただ「漢・元帝時、隨吉于曲陽泉上、遇天仙授吉青縑朱字太平經十部。吉行之得道。以付崇。後上此書。書多論陰陽。否泰災縑之事。有天道・地道・人道云。治國者用之。可以長生、此其旨也」(同 前)ともあって、神書が太平經を指している可能性もないわけではない。「義門読書記」卷22には「前者、宮崇所獻神書。觀注所引太平經典・帝王篇、語神書、乃若此。其鄙而楷方信其說。是亦夏賀良之流也」とあって、この書は前漢の夏賀良の思想の流派に近接する内容を持つものともいう。この夏賀良という人物は「前漢書」卷75に「初成帝時、齊人甘忠可詐造天官歴包元太平經十二卷。以言、漢家逢天地之大終、當更受命於天。天帝使真人赤精子下教我此道。忠可以教重平・夏賀良、容丘・丁広、東郡・郭昌等」とあるように、甘忠可に教を受けて、漢の再受命を主張した一派に属する。「前漢書」卷75によると「初成帝時、齊人甘忠可詐造天官歴包元太平經十二卷。以言漢家逢天地之大終、當更受命於天。天帝使真人赤精子下教我此道。忠可以教重平・夏賀良、容丘・丁広世・・」とある。甘忠可は齊の人であって、于吉・宮崇はいずれも琅邪の人である。その系譜は異なるが双方、陰陽術を基礎理論としていることには変わりがない。

こうして、前漢の終わり頃から生じてきた天道に重点を置く太平經に依拠する思想集団が徐々に広がってくる。これにたいし儒家の正統派の人々は「中累校尉劉向奏忠可假鬼神、罔上惑衆、下獄治服、未断病死」(同 前)と述べ、彼らは鬼神によって人を惑わせるものとして糾弾し、それを批判した。また、哀帝の時「司隸校尉解光、亦以明經、通災異得

幸。白賀良等所挾忠可書、事下奉車都尉劉歆。歆以為不合五經、不可施行。而李尋亦好之。光曰、前歆父向奏忠可下獄。歆安肯通此道。時郭昌為長安令、勸尋宜助賀良等。尋遂白賀良等。皆待詔黃門。數召見陳說。漢歷中衰、當更受命。成帝不応天命、故絶嗣・・遂從賀良等議。・・以建平二年為太初元年・・賀良等復欲妄變政事。大臣争以為不可許。賀良等奏言、大臣皆不知天命、宜退丞相・御史。以解光・李尋輔政。上以其言亡驗。遂下賀良等。・・賀良等反道惑衆姦態當窮竟、皆下獄・・皆伏誅。尋及解光減死一等、徙敦煌郡」(同 前)とあって、司隸校尉解光が甘忠可の書を夏賀良が所持しているとして、弾劾文を上奏している。劉歆もまた、この書が五經に合致しないとして、認可すべきでないとして批判した。別に李尋らもこの書を好んだけれども、解光は劉向が甘忠可を下獄させたのだから、本来、劉歆がこれを認めるはずはないといった。ただ長安令郭昌が李尋にたいして、夏賀良を救うよう勧めたため、その結果、良は救済されて、やがて待詔黃門に任命されるに至る。そこで哀帝に召見されて、漢歷中衰を再受命をもって対応する旨の意見を述べ、帝はその議を用いて太初元年と改元し、それに応じた。夏賀良はまた、今の政治を改変すべしとし、上記、解光・李尋を政治に参与させようとする。しかし大臣たちはこれにこぞって反対したため、帝は結局、夏賀良らを下獄させた。従って、この一件は劉歆ら人道派である儒家側の天道派にたいする政治的勝利であるといえる。

前漢末に登場した王莽の場合を見ると、彼は儒服を着用して朝廷に臨んだというように、儒家としての自覚があった。しかし、彼はその地位が上昇して、皇帝位に近接すればするほど、劉氏の伝統的重圧を自覚し、その圧力を避けるため天命を信じ、それに依拠するようになる。まず「奏武功長孟通、浚井得白石。上円下方、有丹書著石文曰、告安漢公孟為皇帝、符命之起自此始矣。・・以白太后。太后曰、此誣罔天下、不可施行」(漢書卷99上)とあって、符命を皇太后に伝え、その支持を求めたが、太后はこれを拒否した。次いで「劉京、車騎將軍千人扈雲、大保属蔵鴻奏符命・・京言齊郡新井。雲言巴郡石牛、鴻言扶風雍石。莽皆迎受」(同 前)。「劉京上書云、七月中、齊郡臨淄縣昌興亭長辛當、一暮數夢曰、吾天公使也。我告亭長曰、撰皇帝當為真。即不信我、此亭中當有新井。亭長晨起視亭中、誠有新井。入地且百尺・・冬至、巴郡石牛、戊午雍石文。皆到于未央宮之前殿・・。臣与太保・安陽侯舜等視天風起塵冥風、止得銅符帛函於石前。文曰、天告帝、符獻者封侯、承天命用神・・」(同 前)と天より符命があった。そのため、「莽居撰、即作銅匱為兩檢署、其一曰、天帝行璽金匱函。其一署曰、赤帝行璽某伝予黃帝金策書、日者高皇帝名也。書言、王莽為真天子」とあり、重ねて「即日昏時、衣黃衣。持匱至高廟・・御王冠謁太后」(同 前)とあって、彼は真天子に就位する。このように、王莽は帝位獲得を目標とした時期に天の符命を尊重したが、この行為は人道に依る儒家思想では天子を克服出来ないため、天道を利用すると言う政策的策略が働いていたと考えられる。彼は新朝を建てると、それ以後は王田などの政策を採り、往年のように儒家的理念を掲げているところから見て、政治的手段としての天命利用が窺えるのである。

< 3 > 後漢当初の三代の皇帝は凶讖を信じ、桓譚・尹敏ら正統派の儒家の批判を受け

た。既に先掲の拙文で論じたように、こうした天・人の矛盾を買違という人物が双方の折衷を考案して、これを乗り切った。以後、後漢官僚の思想はかかる折衷主義の流れに沿うものとなった。この天道優位の傾向は先述のように、伝説的な始祖である于吉の得たとされる太平経を基とする道教風な教義と、この頃、流入し始めた仏教的思想が相まって一層広まっている。于吉については、「芸林彙考」巻6に「按三国志注引江表伝曰、于吉来呉立精舍、焼香読道書、製作符水以療病」とあり、「実寶録」巻11に「道士于吉」とあって双方で同文を示している。別に「法苑珠林」巻79に、「漢・沙門于吉能祈雨」とあって、ここでは沙門と記しているのである。

「後漢書」巻60、襄楷伝に桓帝の時代であるが、「又、聞、宮中黄老・浮屠之祠、此道清虚、貴尚無為、好生惡殺、省欲去奢・・或言老子入夷狄、為浮屠」とあって、黄老・浮屠を宮中で祀っていたという。すなわち朝廷の内朝において両教が信仰されているのである。「西山読書記」巻36にも「桓帝時、襄楷言。仏陀・黄老道、以諫欲令好生惡殺、少嗜欲、去奢泰、尚無為」とある。この流れが靈帝代、黄巾の張角の反乱時、「奉事黄老道、蓄養弟子、跪拜首過、符水呪説以療病、・・訛言蒼天当立・・大方馬元義・・数往来。京師以中常侍封諱・徐奉等為内応約。以三月五日内外俱起、未及作乱。而張角弟子濟南唐周上書告之。於是、車裂元義於洛陽。靈帝以周章、下三公司隸使、鉤盾令周斌將三府掾属、案驗官省直衛。及百姓有事角道者、誅殺千余人・・」とあるように、黄巾の徒の馬元義が宦官らと内応を約束した思想的理由は、その結節点に黄老道があったためであろう。古く前漢の竇太后が黄老道を信奉して、儒家的官僚と争ったことがあるように、内朝にはそうした伝統が存在していたのである。「後漢志」8に「桓帝即位十八年、好神仙事。延喜八年、初使中常侍之陳国苦縣、祠老子於濯龍」とあって桓帝自身もまた、神仙事を好んだと言われる。

< 4 > 後漢晩期、内朝に天道思想が浸透する傾向の中で、それを反映して、外朝の儒家官僚たちの思想に変化は見られるだろうか。「後漢書」79上、儒林列伝に「梁太后詔曰、大將軍下至六百石、悉遣子就学・・自是遊学増盛、至三万余生。然章句漸疏而多以浮華相尚。儒者之風蓋衰矣」とあって当時、学生の数は一万余人と増加したが、その学問内容は「浮華」に流れたといわれる。すなわち、この時期に儒家思想の思想的深まりは見られなかったのである。同じく孔僖伝には「延光元年・・召季彦・・(安)帝親問・・今貴臣擅權、母后党盛。陛下宜修聖德、慮此二者。帝默然、左右皆惡之」とあって、次子・季彦が儒家思想によって、母后党などの内朝の党派的権力を批判している。同伝には「二子、長彦・季彦・・長彦好章句学、季彦守其家業(恵棟曰、連叢子云、長彦頗隨時為今学。季彦壺其家業、兼修史漢、不好諸家書。孔大夫堧謂季彦曰、今朝廷以下・四海之内、皆為章句内学。而君独治古義。治古義則不能不非章句。非章句内学則危身之道也。棟謂以凶讖、説經、謂之章句内学。何休之於公羊、鄭元之於三礼、是也。光武信凶讖。故四海之内、皆為内学。方術伝云、光武信讖。士之赴趣時宜者、皆争談之。自是、習為内学。尚奇文、貴異数、不乏於時。章懷注云、其事秘密、故称内)門徒数百人」とあるように、孔家の兄弟は

それぞれ信奉する学問の内容が異なっていた。長彦の方は今学としての章句学を学び、季彦では古学の尚書・毛詩を採っている。孔昱という人の季彦にたいする意見を徴すると、今は多くの学者が章句内学を学んでいて、その中で貴君のようにあえて古学を択ぶというのは、まさに「危身之道」と憂慮を表明している。従前、正統派であった人道中心の儒家思想は後漢のこの時期に限定すると、むしろこのように異端視されてきているのである。恵棟の注解では今学たる章句学を「以図讖説経、謂之章句内学」と定義しているとおおり、図讖で經典を解釈するものであった。この章句学が思想界の主流になっており、旧来正統であった古学者は政治的には孤立するだけでなく、異端視されているのである。

「後漢書」79・儒林伝上で、この点を検証してみると、景鸞伝では「能理齊詩・施氏易、兼受河洛図緯、作易説」とある。ここに見る施氏易を図緯を用いて解釈した結果が易説であったと思われる。薛漢伝では「世習韓詩。父子以章句著名・漢少伝父業、尤善説災異・讖緯。教授常数百人」とある。また趙暉伝を見ると「時山陽・張匡・亦習韓詩、作章句」とある。鐘興伝では、明帝の時、「詔令定春秋章句・又使宗室・諸侯從興、受章句・程曾・作孟子章句」とあって、春秋・孟子を新しく解釈して、その章句を作っている。更に同伝下によって見ると、保咸伝では建武年間に、彼は皇太子に論語を講じたが、「又為其章句」と記す。伏恭伝には「湛弟黯・明齊詩、改訂章句、作解説九篇・初父黯章句繁多。恭迺省減・浮辭、定為二十万言」とあるように、父子相伝で章句学に関わっているし、また「杜撫・少有高才。受業於薛漢。定韓詩章句・建初中為公車令」と杜撫は韓詩章句を作成している。

他方、衛宏伝には「少与河南・鄭興、俱好古学・時濟南・徐巡師事宏、後從林受学。亦以儒顕。由是、古学大興。光武以為議郎」とあり、同伝で「季育・頗涉獵古学。嘗讀左氏伝・以為前世、陳元・范升之徒・而多引図讖不捭理体。於是作難左氏義四十一事」とあって、季育は古学を基に、陳元・范升等の学者が図讖を用いるのは理に合わないとして今学を批判する。同じく張馴伝には「能誦春秋左氏伝、以大夏侯尚書教授・奏定六経文字・光和七年徵拜尚書、遷大司農」とあって、古学の方を尊重している。これは靈帝の末期であるが、古学も一応、今学に対峙しつつ、後漢期を経過していたことが分かる。

<5> 前漢の哀・平帝期、楊宝は欧陽尚書を教授し、その子の震も「少好学受欧陽尚書於太常桓郁・諸儒為之語曰、関西孔子」（後漢書列伝44）と欧陽尚書を修めた。後、陳留の楊倫を推挙した時、「師事司徒丁鴻、習古文尚書」（同・儒林列伝）とあるので、この学問系列は古学に属するものであろう。順帝期、「楊倫前後三徵、皆以直諫不合、閉門講授」（同 前）とあって倫は古学を講じたが、その系列には牟融・王良・桓榮がおり、「榮世習相伝授、東京最盛。扶風杜林伝古文尚書・由是、古文尚書、遂顕於世」（同前）と、この時に古文尚書が最盛期を迎えたと言われる。これは「女主」としての鄧太后専制期、太后の儒家的外朝重視の状況に照応したものであろう。冒頭の楊震は「延光二年、代劉愷為大尉」とあって、三公の立場から宦官専権を批判した人物である。桓榮の子、郁

の伝によると、「帝（顯宗）自制五家要說章句、令郁校定於宣明殿」とあって、既に顯宗の時期に、今学の発端があることは確かであるが、この期、なお充分の展開を見せていなかったのである。

古学派の桓榮も一方では「初榮学朱普、学章句四十万言、・・及榮入授顯宗、減為二十三万言。郁後刪省定成十二万。由是有桓君大小太常章句」（後漢書37、桓榮）とあって、今学たる章句を整理・策定する作業も行っている。すなわち、光武帝が図讖を信じたのを契機として、古学を改訂して章句とし、今学化する試みが次第に展開してくるのである。

前代、章帝期に竇憲は上記の桓郁が代々帝の師であったので、これを推薦して禁中で經典を講義させた。ただ憲の部下の班固の場合は「所學無常師、不為章句、舉大義而已」（後漢書40上）とあって、今学の章句は学ばなかったとある。憲の部下は多く武弁であったので、憲自身の学問も見べきものはなかったと思われる。しかし、彼は車騎將軍になって崔駟を辟召したが、この駟は「年十三、能通詩・易・春秋、通古今訓詁。博學有偉才」と博學で著名であった。このように当時、官僚になるのには儒家的學問が必須であったので、有力者もこれを好んで招請した。その場合、古学か今学かの選択は当時、必ずしも一定ではなかった。駟の中子の崔瑗では「好學盡能傳其父業・・遂明天官・歷數・京房易傳・・後復辟車騎將軍閭顯府、時太后稱制」（後漢書卷82）とあって、車騎將軍府に召されるが、閭顯の失脚とともに排斥される。彼の學問は父業を継ぐ上で、見られるとおり天道に向かつて傾斜していく様子が見られる。

<6> 「初中興之後、范升・陳元・李育・賈逵之徒、爭論古今學。後馬融答北地太守劉瓌及玄答何休義、摛通深。由是、古學遂明」（後漢書・卷65）とあって、後漢初に古・今學についての議論が展開される。ここで古學が明らかになったが、賈逵が「讖」によって經を解釈する方法を考案し、以降、それが經の「章句」として流行した。「儒林列傳第69上」に「梁太后詔曰、大將軍下至六百石、悉遣子就學。每歲輒於鄉射月、一饗會之、以此為常。自是、遊學增盛、至三万余生。然章句漸疏而多以浮華相尚。儒者之風蓋衰矣」とあって、この時期に學生こそ増加したが、實質は「章句」學に疏（うとく）なり、代わって「浮華」を尊ぶ風潮が生まれたため、儒者の傳統的氣風は衰えたと言われる。当時、党人たちは権力によって誅殺され、党に関わった高名の善士は多く流配されていた。従って、新たに生じた「浮華」の思想の潮流は以後、魏晉時代まで繼續するに至る。一体、この「浮華」の内容とは何か。

「魏志」卷3に「其郎吏學通一經、才任牧民。博士課試、擢其高第者、亟用其浮華、不務道本者、皆罷退之」と見えて、郎吏選抜に内容の変化があったことを言っているし、「吳志」卷16にも「今則不然、浮華者登、朋黨者進」と「浮華・朋黨」の人たちが官吏に登用されたとある。少し時点が下るが、「晉氏以來、文章競為浮華、魏丞相泰欲革其弊」（資治通鑑・卷159）とあるように、文章に經義が用いられず、代わって「浮華」が競われたと言う。思うに曹操父子を中心とする建安文學の華美が官途にも反映してきたものであろう。「史傳三編」卷19には「老莊浮華非先王之法、言不可行也」とあって、「浮華」は老莊

思想と結び付けられている。こうして見ると、少なくとも「浮華」とは儒家思想に反する性質の思想内容であった。「経義考」巻140にも「王邵史論曰、魏晉浮華、古道夷替、・・士大夫恥為章句」とあって、後漢時に盛んであった儒家の「章句」さえもが排除され、「浮華」が主流になったと記述される。亦、「史纂通要」巻9に「初（何）晏好老莊書与夏侯玄、荀粲、王弼之徒、競為清談、祖尚虚無、謂六經為聖人糟粕。由是、天下士大夫争慕効之、遂成風俗。不可復制。明帝惡其浮華抑而不用・・」とあるが、こうした老莊を主とする清談の徒は儒家の經典を聖人の糟粕とけなし、「浮華」にそれを代えたのである。この学を「漢魏之季、何晏・王弼始好老莊、尚清談、謂之玄学、学士大夫翕然景嚮、流風波濤不可防制。於是、稽康・阮籍・・皆一時名流跌宕・・竹林七賢蔑棄礼法」（郝氏統後漢書・巻48）とあって、「玄学」と称する。「歴代通略」巻1に「自魏以来、何晏・王弼之徒、祖尚浮虚、敗棄礼法。士大夫靡然一從之。武帝曾不之止。君臣上下其弊如此。凡此皆晉之所以亡也」とあり、武帝・司馬炎がこの弊害を抑えなかったのが、晋朝は滅亡したと論ずるほどである。「郝氏統後漢書」巻83下に「竇太后好黄老術・・太后不悅下綰・蔵吏、皆自殺。故漢政之不能追還三代。皆老莊之術誤之也。終漢四百余年、而道術不復于正。及何晏・王弼再尚老莊為清談、宗虚無。為魏晉膏肓之疾云」とあって、前漢期まで遡って、その起源を論じているが、その当否はともかくとして、この思想の流布が魏・晋期の弊害となったといっている。ただ魏朝では明帝・曹叡が清談の士を排除し、「明帝以其浮華、皆抑黜之。及爽秉政。乃復進叙任為腹心。颺等欲令爽立威名於天下」（魏志・巻9）とあって、一旦彼らを退けるが、明帝が崩じ曹爽が政治を執ると、彼らは復権した。しかし嘉平元年になって、「太傅司馬宣王奏免大將軍曹爽、弟中領軍羲、武衛將軍訓、散騎常侍彦、官以侯就第。戊戌、有司奏収黃門張当、付廷尉、考實其辞、爽与謀不軌。又尚書丁謐・鄧颺・何晏、司隸校尉畢軌、荊州刺史李勝、大司農桓範、皆与爽通姦謀夷三族」（魏志巻4、齊王）とあって、司馬懿が爽を排除するとともに、浮華の党人は総て排除される。司馬懿は「博学洽聞、性深阻・・尤善孫呉兵法」（郝氏統後漢書・巻75上）とあって、軍略に長じていたが、思想的に浮華の徒とは本来相容れない人物であり、「自是、政歸于懿父子」（蕭氏統後漢書巻2）とあるよう、魏朝に代わって晋朝を立てることになる。

<結語> 前漢の晩期に漢朝の命運が衰えると、再受命のため、天の意志を窺う思想が出現する。甘忠可・夏賀良に始まり、その系列と思われる前漢・元帝期、于吉が太平経を提示したが、儒家・劉歆がこれを妖妄として排撃した。ただ、これが宮中にあった黄老思想と共鳴して、やがて後漢末、黄巾の乱に繋がっていく契機となる。遡って後漢初期、光武帝が図讖を信奉したため、儒家と対立した。この天・人の矛盾を買達が折衷し、章句学を構成することによって、その対立を回避した。以後、古・今学として儒家思想は展開していく。

外戚・梁太后がその詔で太学生を増加し、三万余人となってから、章句学が疏になって、代わって「浮華」が流行する。文章の華美は文学の流行からであろうが、その思想内容は老莊であるという。この「浮華」が曹操父子による建安文学によって一層、盛行する

ことになった。他方、曹操の後継を巡って、曹丕と曹植兄弟をめぐって、その側近同士が激しく争う。前者は儒家系の思想によるもので、後者は老・仏系の思想を背景とするという相違があった。魏の明帝は「浮華」を抑制し、曹爽は逆にそれを推奨して対抗した。そのうち、爽は司馬懿と覇権を争って敗れ、彼の側近も排除されて、儒・老荘の思想闘争はこゝにおいて終結した。

注

(注1) 拙稿。「史学研究」第256号、2007・5、廣島史学研究会刊。